

Project 『Engawa, The Self in Season』

小尻健太×ハネス・マイヤー（ドイツ）



小尻健太©momoko japan



ハネス・マイヤー

ダンサー・振付家の小尻健太と、ドイツを拠点に活動する建築家・アーティストのハネス・マイヤーによるダンス作品の国際共同制作事業。両者は、新たな視点をダンス作品へ導くために、建築、日本庭園、都市デザインなど多分野の専門家と連携し、2023年より「縁側」という日本独自の空間概念を手がかりに、上演環境におけるパフォーマーと観客の新たな相互関係を探求している。季節のうつろいと私たちの暮らしをつなぐ縁側という視点から、環境と共存する身体の在り方を問い直し、建築と身体、内と外、そのあわいに生まれる余白から新たな想像と感覚をひらいていくことを目指す。

本事業では、これまでのリサーチと対話の蓄積をもとに、ダンス作品『Engawa, The Self in Season』を創作。協働リサーチの集大成として「舞台」を最終プロセスの場と位置づけ、愛知県豊橋市と神奈川県横浜市の二都市で上演を行った。

公演概要

【豊橋公演】日時：2025年11月29日（土）～2025年11月30日（日）全2公演 会場：穂の国とよはし芸術劇場PLAT 上演時間：60分

【東京公演】日時：2025年12月5日（金）～2025年12月6日（土）全3公演 会場：横浜赤レンガ倉庫1号館3Fホール 上演時間：60分

クレジット

振付演出・コンセプト：小尻健太

セノグラフィー・コンセプト：ハネス・マイヤー

出演：鳴海令那、佐藤琢哉、堀田千晶、畠中真濃、青柳潤、小尻健太

音楽：tatsukiamano

照明デザイン：吉本有輝子(MAHIRU)

照明：花輪有紀(MAHIRU)、伊藤泰行(MAHIRU)

音響デザイン：藤巻俊介

衣装：山口真有美(FUKUBI)

テキスタイルデザイン：森山茜 /Studio Akane Moriyama

衣装協力：須貝朗子、菅井一輝

舞台監督：川上大二郎(スケラボ)

大道具製作協力：近藤正樹、池森秀明

プロダクション・マネジメント：遠藤七海

宣伝美術：川村祐介

宣伝写真・記録撮影：momoko japan

記録映像：青空

広報撮影：ルーカス・プロヴォ

アドバイザー：アギム・カーチュク〈建築学・都市計画〉、エマニュエル・マレス〈庭園文化史〉、高橋隆宜〈スポーツバイオメカニクス〉、児玉北斗〈舞踊美学、パフォーマンス研究〉

主催・企画制作：SandD

共催・共同制作：独立行政法人国際交流基金

協力：急な坂スタジオ、特定非営利活動法人黄金町エリアマネジメントセンター、公益財団法人三溪園保勝会

リサーチ協力：京都芸術センター(Co-program2025 カテゴリーC『共同実験』採択事業)

助成：公益財団法人アイスタイル芸術スポーツ振興財団

<豊橋公演>

主催：SandD、公益財団法人豊橋文化振興財団

共催：豊橋市、独立行政法人国際交流基金

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

<横浜公演>

主催：SandD、ヨコハマダンスコレクション

2025、横浜赤レンガ倉庫1号館[公益財団法人横浜市芸術文化振興財団]

共催：独立行政法人国際交流基金

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(国際芸術交流)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会



第1回報告書 | 砂金有美

あわいの庭で待っている

Yumi Isago

1st



©momoko japan

『Engawa, Imaginary Landscapes』(2024年)より

2025年11月29日、豊橋で世界初演を迎える『Engawa, The Self in Season』は単体で鑑賞可能な舞踊作品であると同時に、横浜赤レンガ倉庫1号館振付家に就任した小尻健太とドイツ在住のハネス・マイヤー（建築家/アーティスト）が協働する中期プロジェクトの流れを汲んだ公演でもある。本作の前段には2024年末の『Engawa, Imaginary Landscapes』及びその実作へ向けたオープンスタジオやリサーチの履歴が連なっており、前回と今回ではタイトル、ダンサー、振付、美術、会場その他が異なりつつも、モチーフはどちらも「縁側」だ。

そもそも、なぜ縁側なのか。舞踊が築く縁側とは？

リハーサル開始1週間前にあたる10月14日に二人へ取材を行った。（編集に際し、10月下旬のリハ期間に得た情報も盛り込んでいる）

「縁側」で「Engawa」

「自分が日本の“縁側”に辿りついたのは正直予想外でした。普通の団地育ちですし、小さな頃からバレエっ子。バレエはやっぱりヨーロッパの文化です。だけど

ずっとどこかには、ルーツに繋がるものへの憧れや懐かしさが眠っていたのかもしれない」

クラシックバレエを起点にキャリアを歩んだ小尻はローザンヌ国際バレエコンクール入賞後渡欧、コンテンポラリーダンスの最先端NDT1★1へ日本人男性として初入団した。帰国ののち個人プロジェクトSandDを立ち上げ、バレエやコンテンポラリーはもちろんフィギュアスケート、オペラ、ミュージカル等多彩なジャンルの現場へ入る。共同制作者のマイヤーは、欧州の様々な大学で教鞭を取りながら建築やロボティクスの力によるアート作品を発表してきた。2016年のゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川招聘を皮切りとする日本での活動歴ももう長い。

二人にとっては『Kizuki-au 築き合う—Collaborative Construction』（「あいち2022」参加作品）のオープニングが初めての協働公演だったが、縁側への予感はこの時点から既に芽吹いていたという。

「私の研究室チームで作った木製の舞台装置には、縁側だと解釈できるスペースがありました。上演中、そこへ座った健太の姿が美しかった。構造物に感情が宿った瞬間

間でした」

各国に飛ぶ両者のタイミングは公演後も奇遇に合致し、縁側を巡る対話の機会が増えていく。

「よく覚えているのは、パリのベンチに座って健太とたくさん話した事。宮殿の庭で、『えっ、あなたも縁側に興味か?』なんて」

廊下ではなく、ベランダでもない。日本建築特有の様式とされる縁側は家屋に暮らす人々の時間を繋ぎ、「内」と「外」を両立させる。

マイヤーはかねてより建造物の内部と外部の移行部分、公と私を超越できるような構造に関心を持っていたようだ。玄関ポーチ等は西洋建築にも在るが、時には隣人との社交の場にも転じてしまう縁側独特の社会性の高さ、外に開放された構造ゆえの天候や気温との連動性に魅了され、独自の探究に挑戦していた。一方、近年の小尻は己の身体感覚を研ぎ澄ませていくうちに、踊る自分のからだとそれを取り巻く世界との境界に目を向けるようになっていた。そんな中でふと、「無心で自然を感じる自分」と「無心で踊っている自分」、二つのモードの不思議な相似をすくい取る。「記憶」と「今ここ」の同時再生と言えばいいのか、共通点はあわいの感覚、あいまいな意識状態なのだと思いついた時、縁側の文化に光を見た。

題を英字でEngawaとしたのは、日本の伝統や物体としての縁側の再現が舞台の目的ではないからだ二人は語る。二人にとっての縁側とは、ある存在とある存在が結びつく場所に生まれる二者のあわい、言うなれば「縁」が成り立つ場所だった。

「縁側付きの家は減る一方だけれども、日本家屋の空き家を活用したプロジェクト等は目立っています。僕とハネスの考えでは、利便性は失われても、内と外をあいまいにする機能自体は求められているんじゃないかと」

この時代を映した形へ、「縁側」を変換してみたい——アプローチは異なれども、舞踊家と建築家の欲求は交差した。

「赤レンガ倉庫に振付家のオファーを頂いてすぐ、『じゃあ、ハネスと一緒に縁側を』って。必然でした」

2024年、小尻はマイヤーをメンター（協働を伴う相談役）に指名して本プロジェクトをスタートさせる。約束は2年間。横浜赤レンガ倉庫の名前を小尻が背負う時間と等しい。

「ハネスとだったら、“予想外”まで楽しめるんです」

見える／見えない／見えてくる

フィールドワークに基づくリサーチとメンターシップの導入も本公演の特徴だろう。リハーサルは主宰の考えた構成をメンバーへシンプルに移すスタジオ完結型ではない。日本

のレガシーが色濃く残っている京都、あるいは公演予定地の横浜・豊橋を小尻とマイヤーのみならず音楽担当のタツキアmanoや出演ダンサーらまでもが歩き、土地から得た着想をリハ期間中の作品へと反映させる。音楽に組み込む海の音等の環境音や美術に用いる木材等の採集作業も並行だ。持ち込まれる素材への呼応によって舞台は常に更新され、幕が開くまで多くの要素が流動していく。

小尻曰く、リサーチに加えて他分野の専門家を年単位でメンターに据える手法は舞踊作品の制作においては決して一般的ではない。本年は舞台美術や空間演出を担うセノグラファーの役割が大きいマイヤーだが、メンターの立場ではどのような力を提供したのか。

「たとえば、僕が京都でリサーチ対象の建築を見て感じた事を口にしてみる。『これ、きれいだね』と伝えたとしたら、ハネスはその“美”を建築家の視点からナビゲートしてくれました。ハネスと違い、僕にはリサーチや建築の専門知識がありません。目の前の物の機能や意味を教えてもらって、それを受けて考えた事もさらに伝えて、舞踊に建築を取り入れるための対話を重ね続けます」

ただし、メンターは教師ではない。象徴的な出来事をマイヤーが教えてくれた。

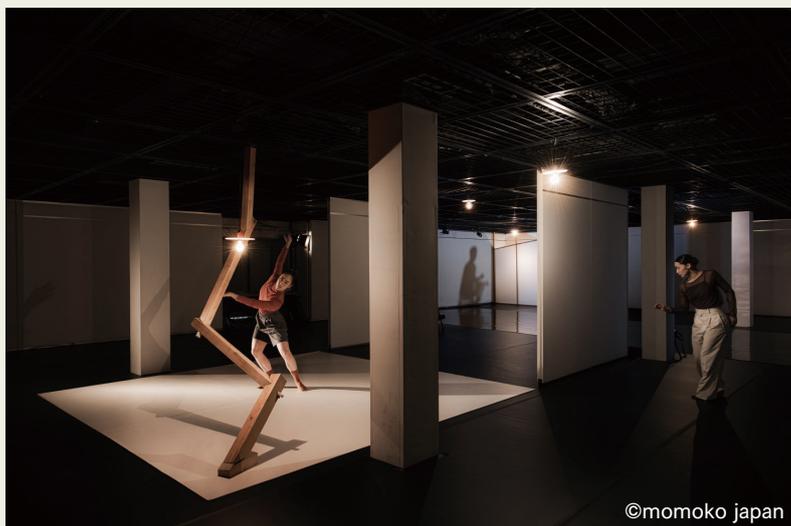
「前作の公演会場（赤レンガ倉庫2F）には6本の柱がありました。私の眼には、天井を支えているその柱たちが空間にとって最も重要な構造に見えた」

建築家の眼を通すのならば、それは何より明白だった。「でも、同じ空間にいるダンサーたちには、6本の柱が“見えていない”と気がつきました」

身体を観客に見せる事を優先するなら、踊るための場にそびえる柱は動きの範囲を区切る障害であり、回避／無視すべき境界線と認識され得る。

「これは“見えていないふり”? それとも本当に“見えていない”?」

ダンサーの答えはバラバラだったが、対話の結果、柱たちは「触れる」「(観客の視線を)遮る」「(柱をあえて)無視する」等々、空間、演者、観客らが相互反応を起こす装



©momoko japan

『Engawa, Imaginary Landscapes』(2024年)より。赤レンガ倉庫2Fの会場

置へ変わった。

建築の講義が要るのではなく、建築家の視界を舞踊家に移す。翻って舞踊家の視界を建築家に移す。この「翻訳」こそがメンターの仕事だと昨年のマイヤーは直感する。

「本作の海外公演があったとしたら、観客はどうか感じるかが楽しみです。日本文化を表現したものと捉えられるか、もしくは意図が理解され、自分たちの中にも在るものだ、と受け取られるか」

建築と舞踊の共作は数多いものの、それは出来上がった建造物にダンサーを招き入れるような、ともすれば権威的な作家の建築をダンサーで飾り立てるようなタイプも少なくはなく、双方向の力が活かされる作品は珍しいとマイヤーは言う。

「日本での創作を私が継続できているのも、“縁があった”のだと思う」

余白が描く

実作前のインスピレーションを追う過程では、都市デザイン研究者のアギム・カーチュクや日本庭園研究者のエマニュエル・マレス、振付家で舞踊美学研究者の児玉北斗らマイヤー以外のプロフェッショナルのもとへも小尻は自ら赴いた。ダンサーが振付を行う場合に指摘されがちな「感覚だけでやっちゃう」事を小尻は避ける。興味を放置せず、探求心は身体感覚の言語変換を躊躇わない。その点はマイヤーも同様だ。リサーチの質は公演の質を担保しないと承知の上で、二人の目指す縁側づくりには、完成までに必要なモノやコトをクリアに理解するための正しい知識が不可欠だと考える。といっても、小尻とマイヤーが望む知識とは、既成の問いに正解できる一意解を指すのではないだろう。

「ハネスと決めたタイトルの後半、The Self in Seasonには“旬”のイメージを込めました。縁側と季節の関係は深い。日本語のままではしっくりこなくて、解釈の余白を持たせてはいますが……今が旬、といわれるように、ダンサーの身体にも“その時”にしか出せない力があるものです。そしてお客様にも、自分だけの新しい季節をみつけてほしい」

伸縮自在な可能性と親しむ二人の静けさに、協働者たちへの信頼が薫るようだった。

(2025年11月)



上下：京都でのリサーチの様子



★1 NDT (Netherlands Dans Theater/ネザーランド・ダンス・シアター)
主力カンパニーのNDT1と、若手ダンサーのNDT2により構成される。

第2回報告書 | 砂金有美

夜明けの前の夢の浮き橋

Yumi Isago 2nd

1st
2nd
3rd

Observer 砂金有美



上演に向けたクリエイションは大きく3期に分かれていた。

(1) 発進と発信：10月21日～26日@横浜赤レンガ倉庫

出演者への振付が始まる。創作プロセスを一般に広く開いていこうというカンパニーの意向により、期間中は小尻のバレエ&コンテ基礎クラスまたは堀田千晶による即興性と内的感覚に焦点を当てたダンスクラスへの参加やリハーサル見学が可能なオープンスタジオを多く設定。小尻が教える創作ワークショップ、建築と舞踊の融合についてマイヤーが語るレクチャーイベントも開かれた。

昨年の公演から継続出演となった鳴海令那は佐藤琢哉・青柳潤と初対面、畠中真濃・前述の堀田とは交流があったものの、同じ舞台に立つのは初めてだ。一方、小尻にとっては、「全員僕と一緒に踊った経験があり、実力だけでなく佇まいも含めて信頼できるダンサーたちです。どう転んでも大丈夫だと思えるメンバー」。振付はシーンごとに小尻が動きを実演・指定した上で、各ダンサーの解釈や即興を絡ませながら編み上げられる。明確

な名のついたムーブメントを組み立てて作るかたちではなかったのだが、素人目には「事前の振り写しでもあったのだろうか」と一瞬首を傾げたくなるほど振付ける人間と振付けられている人間のスピードが呼応してみえ、ポジティブに動揺する。

一般非公開のリハ1日目にはモーションキャプチャー素材の作成があった。ホール隣接のホワイエにて運動工学者の高橋隆宜がダンサーひとりひとりのインプロヴィゼーションを撮影し、動きのデータを取っていく。3Dモデルへの変換によって単純化されたダンサーたちの身体は直接の舞台演出に使うのではなく、小尻が今後振付を考える際の参考資料用とのこと。“美しく動けてしまう”ダンサーの動きを崩すためのヒントであり、コマ数の少ないパラパラ漫画や2Dゲームのドット絵のような歪さを振りに盛り込む目論見だ。

並行してマイヤーはリハ期間開始前から舞台監督・川上大二郎らと共に美術の製作にとりかかっていた。縁側のイメージを抽出した巨大な木製のフレーム、「ビルボード」と呼ばれる木枠と同じぐらい大きなスクリー

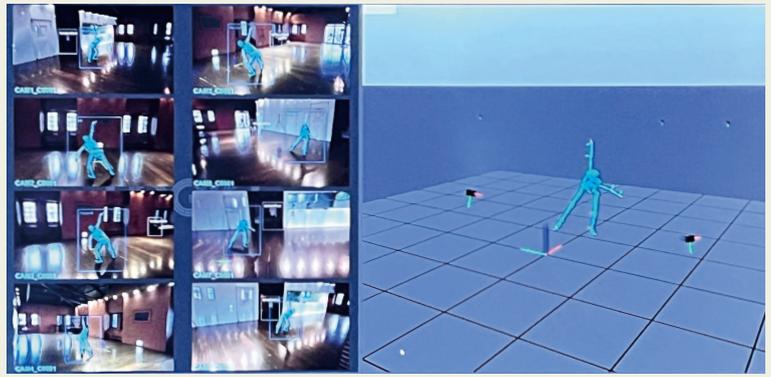
ン、そしてこの二つの装置とダンサーを照らす照明が作品の鍵なのだとして自作のミニチュアで説明してくれる。予算等クリアすべき問題はあっても「舞台空間にenigma★1を表したい」と明る。リハ期間半ばには実際に動かせる仮のフレーム装置も登場し、ダンサーと美術の関係性を模索した。

(2)検討と試走:11月5日~16日@急な坂スタジオ→横浜赤レンガ倉庫

リハ第1期終了後~リハ第2期開始の間に京都滞在が挟まれた。本プロジェクトのリサーチは京都芸術センター主催のCo-program2025採択事業でもあり、小尻・マイヤー・アマノ・鳴海らが78畳の和室大広間を有する同センターや両足院・無鄰菴等の日本庭園を取材。

その後、別プロジェクトへ出演していた畠中が横浜・急な坂スタジオでのリハより合流し、ダンサーが揃う。期間の後半は横浜赤レンガ倉庫に場所を戻してのリハ。60分の上演時間のうち、リハ第2期最終日の段階でおよそ半分ほどが出来ている。小尻自身の構想は8割がたが練られた傍ら、ソロパートの音楽ほか振付以外の部分でも試行錯誤が重ねられていて、現状通し稽古は難しい。仮の木製フレームは壊れかけるほど使い込まれており、舞台装置を用いた演出についても小尻とマイヤーと両方のアイデアを交わしている最中だ。しかしながら豊橋でのクリエイションを目前に控え、作品全体の流れは舞台監督に共有しておきたいタイミングが来ていた。

小尻のキャリア上、劇場舞台におけるフルイブニング作品の創作は今回が初となる。横浜リハ終了日が初演のほぼ10日前と数えるならばはやる気持ちもあるだろうに、確かな手触りと臆ろな手触りが混在するピースを繋いでほどこき、時には判断の宙吊りも辞さずに進めていけるチームの胆力には驚く。「再演」ではなく「新作」を生むという企みの限りなさ。今はまだこの世界に存在しきっていない姿無きなものに目をこらせるか、流れた時間の先で聞こえる産声の予感を信じられるか。作品の誕生がもたらす祝福の瞬間のためとはいえども、ギリギリまで揺れる未定と未知を受容して歩くには個人の適性が強く求められるだろう。「どれだけ上手いダンサーであっても、“わからない”感覚を楽しんでしまうタイプでなければなかなか新作を踊りたいとは考えません」。笑い声のよく満ちるリハに小尻の言葉をふと思出す。



モーションキャプチャー素材の作成過程



美術のミニチュアモデル



(3)仕上げと幕開け:11月20日~29日@穂の国とよはし芸術劇場PLAT

とよはし芸術劇場プラット・レジデンス事業として豊橋に滞在開始。女性ダンサーとプロダクション・マネジメントの遠藤七海らは劇場管理の施設に宿泊しており、変動しがちなスケジュールの中で創作に集中できる環境は貴重だという。

横浜でマイヤーが見せてくれたミニチュアを原型とする舞台装置が本番用のサイズと素材で作られていた。運び込まれた木製フレームは相当大きく、約250kg。家具

移動用のシールを貼っているおかげでなめらかに滑って見えるけれども、仮装置と比べると存在感も安定感も段違いで、フレームを動かすダンサーの様子をみているだけで質量を感じる。「ただ置いておく」だけではなく、もたれかかったり、下辺を平均台の如く歩いたり、窓枠に見立ててみたりと物体の強度があってこそその面白さが滲み出ている。ダンサーだけが本作の舞台に世界を構築するわけでは決してない。この場を唯一の作品へと昇華させていくためには、マイヤーと小凧の発想と智と遊び心の結晶といえるこのアートこそが必須なのだと言感する。「豊橋滞在期間にグッと大きく動くはず」と夏の顔合わせ時点で聞いていた通り、音響や照明等の調整も進んだ。照明・吉本有輝子が合流したのち、通しのリハが22日に行われる。翌23日は一般向けのリハーサル公開と創作ワークショップ。公開リハでは小凧が各場面の発想元となったプライベートな記憶をいくつか明かす。クリエイション中は出演者たちにも（キーワードの共有はあれど）元ネタのわかる具体的な情景をあえて示してこなかったようだ。

以降も本番を目指した磨き上げが進んでいく。木製フレームについては、上演中に舞台へ降りてくるワイヤーをダンサーたちの手でフックにくくりつけ、位置・角度を大胆に変える演出が決まった。「ビルボード」ことスクリーンの素材は当初の紙を布に変更。公演前日の28日、午前中に出演者の半分が仮衣装を着た状態で60分通したのち、夕方に再び衣装を揃えて正式なゲネプロ。スウェーデン在住の山口真有美が手がけた非常にやわらかく繊細そうなワンピース型の衣装は絹で、山口と同じくスウェーデンを拠点にするテキスタイルデザイナーの森山茜による生地を使用した。肌の質感を拾いすぎてしまわないよう裏地を追加したのは小凧の案だ。

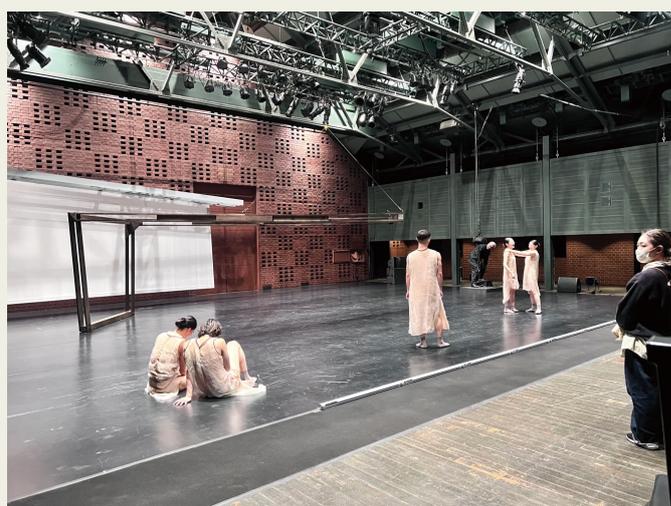
ゲネ終了後はフィードバックののち解散。公演当日の29日も午前～開場前までリハを粘る。ダンサー、アマノ、音響・藤巻俊介のタイミング確認が時間の許す限り続いた。

本番が近づくにつれて場のボルテージが高まる空気は伝わりながら、上演直前の最後の時であってもチーム内のやりとりはごく冷静でフラットに映る。小凧とマイヤーはもちろんプロジェクトメンバーそれぞれのキャラクターとプロ意識のたまものだろう。初日はさやかな冬晴れだった。13時30分開場、14時開演、中天からいくらか傾く澄んだ陽射しがこちらの背骨も伸ばしてくれる。

(2025年12月)

★ 1 enigma

謎、謎めいていてわからないもの、ミステリアスなもの



第3回報告書 | 砂金有美

そしてすべてが還る暁

Yumi Isago 3st

Report



豊橋公演 提供：穂の国とよはし芸術劇場PLAT

本番前日のゲネプロを含めて豊橋・横浜の全公演に立ち会えたのは幸運だった。大きな構成は同一ながら、劇場と回が変わるたび、あるいは経験が積み上がるたび、本作は細胞を入れ替えていく。なにもかもを書き留めることはできないが、見届けた軌跡を可能な限り記しておきたい。

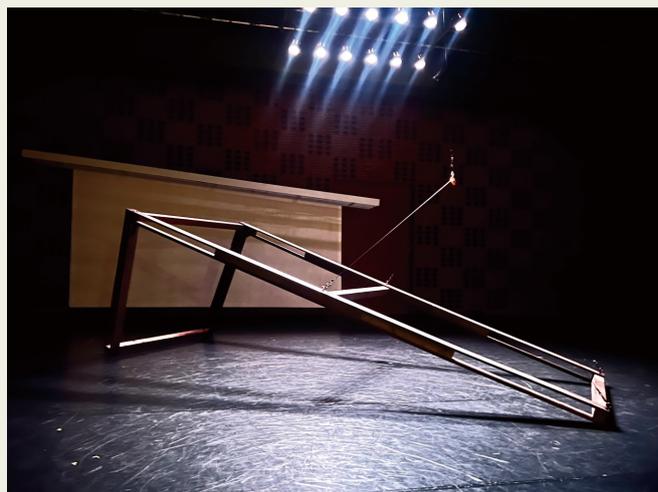
Engawaたちを貫くアイデア

まずはどちらの会場でも、入場した観客の眼へ一番初めに飛び込んでくるのはステージに置かれたフレームだろう。両公演とも舞台と客席の間に幕や袖が存在せず、ひな壇型シートの一列目が出演者の踊る空間とシームレスに繋がっていた。

席を選んで上演時間を待ちかねるうち、どこからともなくダンサーたちが現れる。ある者は地べたに座りこみ、ある者は客席最前列へ。ある者はフレームにぼんやり腰掛け、ある者はその柱に触れた。落ち着いた声で「ご注意」を告げる開演前アナウンスに並行し、ごくゆったりとしたインプロヴィゼーションからオープン

グパートは始まっていく——と、予感も束の間、ぱちんと急な暗転の黒が視覚を閉ざす。

その先はもはや夢幻の世界だ。数拍ののち、青ざめた夜明けにも暮れ切る寸前の宵にも思える濃紺の光が奥を照らした。暗がりのなか、フレームがふち取る空間の向こうでダンサーたちのからださがわめく。平面と直線が切り出す視界は、さながら日本家屋の内からうつろに眺



める外だった。横に並んで絡む肢体が眼を奪う。安全な室内の枠を抜け、もう僅かだけ遠くのほうへと、“縁側”のほうへと観客たちの意識を誘う。ダンサーの姿は人であって人にあらずる群体になり、仏のようにも、屏風に描かれた獣のようにも、風に吹かれる庭のようにも、母に抱かれる子のようにも、いつか耳にした昔話の異形のようにも見えてくる。美しいものはおそろしく、おそろしいものは却ってやさしい。幼い頃の不穏と安堵が呼び覚まされて、不思議とどこかなつかしくなる。

しかし同時に、この体験を本作のテーマと自らの懐古を根拠に「日本的だ」「縁側そのものだ」とだけ断じてみるにはあまりに深い青だった。たとえば本作へ小尻が込めた（加えて筆者が観賞中に同調をした）感情の一つに「眠れぬ真夜中に一人だけ取り残された孤独」があったが、上述のオープニングパートのみならず作品を通して提示される夜の闇、朝焼けの光、黄昏の揺れ、それらが巡り続ける日常に痛みと癒しを得るプロセスは、国など問わぬ普遍的な記憶に思えてならない。そうした孤独を知る者ならば誰もの心で再現されうる感覚だろう。ただし、「景色」は異なってくる。フレームの内と外に何を見るかは本人次第だ。フレーム＝縁側だとも限らない。巨大な窓か、水槽か、テレビの画面か、クラシックなフチつき写真か。

「夜のコンビニ」「残業中のオフィスビル」等ある意味非常に現代日本らしいイメージも小尻の中にはあったそう

だが、明確なキーワードを上演前の情報として前面に押し出さなかったのは、「観客が舞台上にいつ何を見出すか」という賭けを（ダンサーの舞踊については言うまでもなく）このシンプルなセノグラフィーに託したからではなかろうか。本作での小尻は照明・音楽のコンセプトや美術周りの演出も各担当と対話をしながらディレクションした。始まりから終わりまで、空間を切り取るフレームと光の角度によってカメラが複数あるかの如くステージはいくつも表情をかえる。装置と音色は過剰な意味を示さないにもかかわらず、言葉なきダンサーたちの炸裂する衝動とムーブメントの移ろいをうながす。

だからといって、「これを見ろ」とは強制しないのが小尻とマイヤーのEngawaだった。極論を言えば「縁側」が何か知らずに観ようと構わない。いずれにせよ客席と舞台の現在と過去は溶かされて行き、やわらかな場所へと手を引かれる。その時、観客の脳裏に浮かぶ光景はばらばらでよい。いつかどこかの自分の季節であればよいのだ。

国々の彼我

ここで一度、2つの会場の差異を記録する。

11月29日・30日の豊橋公演は共にマチネ。豊橋駅至近の穂の国とよはし芸術劇場PLATのロビーは喫茶コーナーも併設し、地元住民の憩いの場所になっていた。



会場のアールスペースは一般的なホールより舞台と観客の距離が近い。コンパクトであるからこそ、明暗・寒暖と様々な色を演出する照明によって壁やビルボードにダンサーの影が強く濃く映し出されていたのが印象に残った。ダンサーたちが踊る姿をじっとみつめていたはずが、ふとした瞬間、背後に気づく。何倍も大きな彼らの影が前後左右に広がっては縮み、動いては歪み、人の生身から伸びているのだと理解していてもはっとする。

小凧のソロにも、豊橋のサイズならではの演出がある。作品の中盤にダンサーたちがステージほぼ中央でフレームとフックを操作する間、小凧は客席の階段を一段一段踏みしめて上り、両手をかざして天を仰いだ。上手側では横を向かなければ観られないシーンだが、下手側に着席している場合においても、巡礼者に似た儀式的な緊張と熱量を発する存在のそばでは、果たしてそちらに視線を向けてよいのかどうか迷ってしまう。小凧がステージに戻った後のパートで鳴った重なり合う鐘(イタリアで小凧が録音した音)とも相まって、大いなる聖性に捧げられる灯火を目撃できた気にすらなる。ダンサーと思わず目が合いそうなほど、思わず呼吸が合いそうなほどの場の共有は豊橋公演の魅力であった。

横浜公演は12月5日のソワレ、6日のマチネ・ソワレと全3回。横浜赤レンガ倉庫1号館3Fホールは名前の通り倉庫を改装した空間で、豊橋よりも横幅・奥行・天井の高さにゆとりがある。

豊橋公演 提供：穂の国とよはし芸術劇場 PLAT



本作のダンサーを6人に決めた理由には、小凧がNDTで師事した稀代の振付家、イリ・キリアンの影響があるという。舞台上のダンサーが1人:X人に分かれて本作を踊る状況を考えた時、1:4ではいささか足りず、1:6ではやや多く、1:5であればちょうど良い。横浜公演は空間に余裕があるぶん、フレームを利用して区切る場の多面性や対角線の美が立ち上がりやすく、そのようなダンサーたちのアンサンブルも躍動した。

音楽の変化も味わい深い。本作の音楽は、シーンと振りに対応した流れは小凧とアマノが編んだ構成で固定されるが、素材を実際に奏でるタイミングやボリュームの多寡の塩梅が毎公演アマノの手作業にかかっている。調整箇所は多岐にわたるも、豊橋公演と比較して明らかに増幅された水音が、赤レンガではとりわけ景色を変えていた。

横浜の場合、ホールへの入退場の際には海に面した外通路を経由する。最後のソワレが終わったあと、会場を出て聞こえた波の音が作中で鳴る水の響きと重なることに気がついた。土地の記憶を引き取るようなアレンジには、チームが過ごした時間のかけらも内包されているのだろうか。

以上が2会場の特徴であったが、自らの作品で丸ごと一公演を打つことは、振付家のキャリアに並ならぬ意味を生むのではないかと想像する。豊橋の初演後、所感を



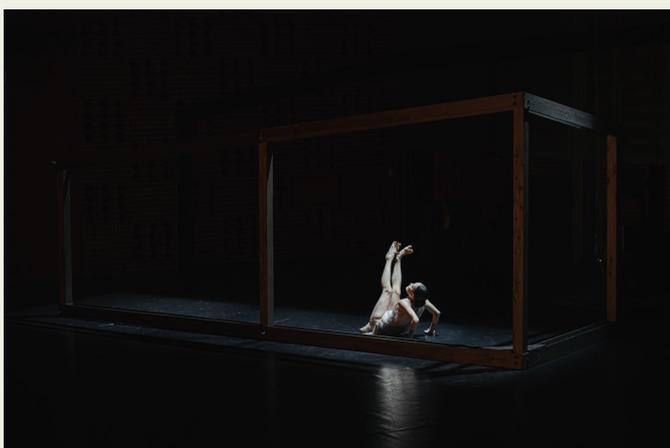
小尻に訊ねてみた。

「劇場舞台にかけるフルイブニング作品の創作は、日本に帰って独立して以来、やりたかったことでした。30分や数分の短い作品の創造と比べても桁違いに大変だけれど、本番で踊っている間はずっと“みんなと一緒にいるんだな”と実感できていた気がします」

第1回報告書の通り、小尻の持つ舞踊スキルのベースは欧州発祥のパレエであり、マイヤーもまた外国の眼を持っている。縁側に惹かれた二人のアーティストが駆使する“工具”は日本の伝統に沿ってはいない。シリーズ前作の公演後には、「日本らしい作品が観られると期待したのに、パレエだったのか」といった反応もこぼれたらしい。あくまで「あえて」の計算された演出なれど、本作についても、もし仮にタイトルすら知らぬまま客席に座る人があったとすれば、ミニマルな衣装にせよ電子的な音楽にせよ、抽象度が高く削ぎ落とされた美術とストーリーにせよ、作品のモチーフが「縁側やも」とすぐに直観できない可能性は多分にある。

けれど本作はEngawaなのだ。彼らが宣言していたように、「縁側っぽい」「日本っぽい」シンボルを一律に連想させる作品づくりは二人にとっての正解にならない。「ある国のもの」を丸暗記してなぞりもしない。Engawaの舞台は答えであって問いかけでもある。あいまいな場所にひたる時間は、あらゆる人の遠くの記憶に合図の波紋を起こしはしないか。他の言葉に訳しきるのは難しかろうと、共有できる魂はないか。あわいの自由を楽しめ

横浜公演 撮影：momoko japan



ないか？ 迂遠であろうがソトのものとウチのものを交えて翻訳し直す道を彼らは選んだ。その選択は“国際的”だが、翻っては、ドメスティックな観客たちへの鋭利な挑戦なのかもしれない。

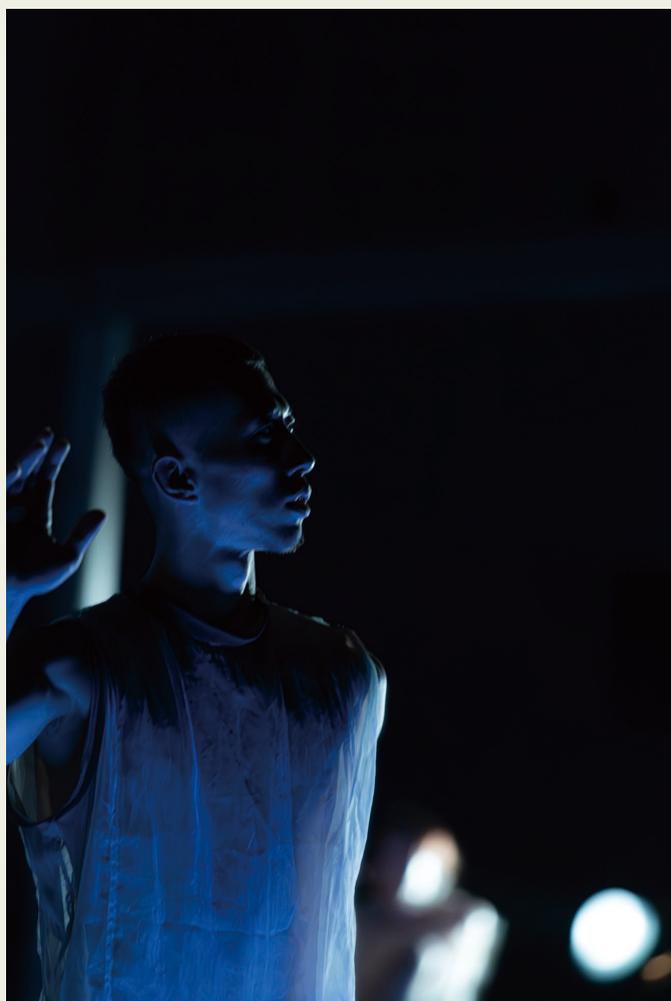
ハッピーエバーアフターの先

全公演終了後、小尻・マイヤー・鳴海の三人は再び京都芸術センターに滞在していた。京都リサーチのまとめのために、滞在最終日の12月12日には同じくCo-program採択アーティスト・水木壘と小尻のトークイベントも開催。また本イベントの前後にて、当日合流したプロダクション・マネジメントの遠藤を含むメンバーからプロジェクトの所感と今後の展望をオブザーブの総括として聞き取れた。

12日昼に京都芸術センターの大広間を覗いてみると、鳴海とマイヤーは公演全体のアーカイブ化作業の最中だった。

鳴海が行っていたのはダンサーたちの振付や込められたイメージ等をまとめたデータ、いわゆる舞踊譜の作成である。

「舞踊譜の存在は知っていたけれど、自分で踊った作品を自分で書き残すのは初めてですね。どんな振付で踊っていたのか、今になってわかってくるのが新鮮です」



海外カンパニーではある程度浸透している舞踊譜は、再演以降を見据えるログだ。振付や動きの写しは記録映像を参照するのを前提に、舞台上でのおおまかな動線、ダンサー同士の位置関係、カウントの取り方等をシーンごとに図と言葉で整理していく。本作の音楽はメロディが抑えられているため、キューの共有は特に重要になる。そのぶん、正確に記録をとるのは骨が折れる作業だろう。

マイヤーのアーカイブは自身による初期の構想スケッチにはじまり、作品が芽吹き、完成し、上演されるまでの記録を図画や写真・文章で綴っていく方式だった。美術の完成に向けては膨大な量のスケッチが描かれ、螺旋階段のような案やセパレート可能なフレーム案ほか来日前より練り始めていた思考の跡が記されている。

小休憩に入ったところで、公演を終えて何を思うかをマイヤーに訊ねた。

「次の公演が必要だと考えています。私たちはスタート地点にたったばかり。SandD自体もまだ若いカンパニーですから」

アーカイブ化には主に二つの目的がある。まず第一はカンパニー内部の蓄積のため、次いで将来のプロポーザルを狙うため。今後の目標には再演を掲げており、海外公演も目指していきたい。

ただ、それは一筋縄で達成できる未来ではないようだ。本作に伴走した遠藤は岡田利規主宰の演劇カンパニー「チェルフィッチュ」の国内及び海外公演における制作キャリアを持つ若手だが、国境を超えて日本の舞踊作品を広報し、コネクションを繋げる難しさを感じていた。

「海外公演を実現できるパターンやアピールのチャンスはいくつか考えられますが、舞踊は特に規模感や予算がネックになる場合があります。この作品は人数も美術も大きい方なので、ハードルが低くはなさそうです」

本作はヨコハマダンスコレクション参加作品で、同時期開催の横浜国際舞台芸術ミーティング(YPAM)とも一部上演期間が重なったものの、各国の舞台関係者が来日

するボリュームが最も高まる時期とは若干のズレがあったのももどかしい。

さらに質問を続けてみると、マイヤーの中では横浜公演2日目のマチネが特に明るく心に残ったことがわかった。

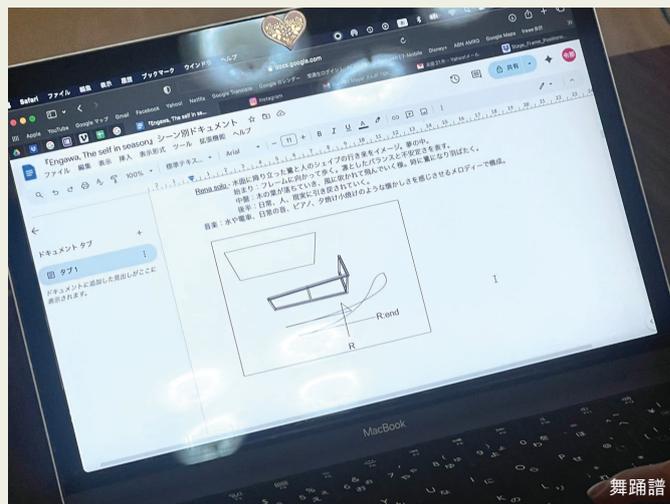
「小さなバレリーナたちからリタイア後とおぼしき上の年齢の方々まで、多様な属性のお客様が客席に一番いらした嬉しい回でした」

集客に関しては写真・映像を活かしたカンパニー公式SNSや小尻を筆頭とするメンバーの個人SNSでの実に細やかな発信が功を奏した面が確実にあるだろう。

一方、そうして足を運んでくれるオーディエンスはもともと舞踊への関心が高い場合も多く、コンテンポラリーダンスを気軽に・自発的に楽しむ新規層が国内では薄い現実を、マイヤーも含めてチームはシビアに捉えている。日本には舞踊を観る文化が根付いていない。本公演特有ではなく、シーン全体のトピックである。

偶然ながら、この日の夜にイベントを共催した水木もコンテンポラリーダンスの舞台を観たのは本作の横浜公演が人生で初めてだったそうだ。「どうみたらいいのだろう？」と公演前はわからなかった、と壇上で語った氏の言葉は舞踊に馴染みのない大多数の率直な本音なのかもしれない。結果、氏が公演に没入して初観賞を楽しんだと断言したのは心強く、作品の力を改めて感じた点ではあるが、「舞踊をみたい」と踏み出してもらう手前にそびえる不可視の壁が垣間見える。

受け手側の傾向に加え、活動が生業になりづらい日本の舞台芸術を取り巻く厳しい実状も、同行期間中に限らずチーム内外のダンサー、振付家、スタッフたちから仄間した。コンテンポラリーダンスの領域は欧州各国でも演劇やクラシックバレエ、ミュージカルと比べてしまえばメジャー度がいくらか下がるといえど、アーティストへのサポート制度やビジネス上の待遇は段違いに優れている。マイヤーの母国・ドイツをはじめ国立の劇場にダンサーが公務員として雇用される国も少なくない。





豊橋公演 提供：穂の国とよはし芸術劇場 PLAT

今回のヒアリングの最後には、小尻もまた後ろ盾のないフリーのダンス・アーティストとしてののがゆさを明かしてくれた。

「欧州と比較して、日本では芸術の価値や芸術家の社会的地位がかなり低く見積もられているように感じます。その価値観は制作環境にも大きな影響があるでしょう。とりわけ舞台芸術・コンテンポラリーダンスに関わる企画は、出演者や振付家への謝金、著作権料・指導料他の予算も欧州の3分の1程度が相場で、公演システム上の制限が強いことも。創作の力を信じて日本で活動していきたい、と奮闘すればするほど、厳しい現実がぶつかってしまいます」

こうした国内外の文化の落差・日本国内での制度と実状のギャップに対して、プロジェクト同行を基に筆者が付け焼き刃で解決方法を提案することは不可能だ。しかし本報告書に残したいのは、環境にうなだれることなく闘うクリエイターたちの記憶である。小尻、マイヤー、メンバーみなが創作の継続と蓄積の力を信じ、舞踊界の発展を諦めないパワフルさが本公演を支えていた。クリエイション中はもちろん公開リハやワークショップの実施中にもチームの意気込みは顕著に現れ、ダンサーとスタッフのオープンマインド、言語や専門性の障壁をジャ

ンプするマイヤーのモチベーションと現場力、そして小尻の指導者としての——単に技術を伝えるだけに留まらず、場をともにする人々に合った機会を準備し、言葉を尽くし、なにより一流の表現者であるが故に可能な、新しい景色を指さし導く人としての——力に感服する瞬間が何度もあった。舞踊の世界を外に開いていかねばと尽力する気概はあまねく変革に必須の土壌となるだろう。マンパワーが要るアーカイブの構築も、未来のためにできる種まきを着実に重ねて行こうとする決断の証にほかならない。本プロジェクトは現在地に突如うまれた「点」ではなかった。関わる人々全ての領域の先達たちより継承された線を交わし、結ばれた場から途切れぬ道が永く永く続いていくよう彼らは歩む。すなわちいまだ満願の日への半ばに在る。

「Engawaのこの先は、今はなんにも決まってはいません」プロジェクトにひと時の幕を降ろしたチームのコメントは正直でまっすぐな覚悟を湛えた。

木製フレームは船によってドイツに渡り、マイヤーの手元で保管される予定だという。海の向こうでしばし眠る数多の夢、やがてもう一度、我々の眼前にあらわれる日を待っている。

(2026年1月)